

報告 2◎

神楽の視点から 米と巫女と神がかりと

梅野光興 高知県立歴史民俗資料館学芸専門員

「神楽の視点から——米と巫女と神がかりと」というタイトルでお話しします。

いざなぎ流の根本祭文である「いざなぎの祭文」というのは、次のような内容です。日本に、天中姫宮^{てんちゅうひめみや}というフマ占いが上手なお姫様がいました。ただ、祈念祈禱の方法を知らないで、天竺^{てんじく}までわざわざ行って、いざなぎ様に祈禱の方法を習ってきます。その時、習ってくるのは病人祈禱のやり方です。「人形祈り」という、ヒトガタの御幣を使う方法や「弓祈禱」という弓をたたく方法だったようです。

ふつう、弓をたたくというと、青森県のイタコを想起しますが、いざなぎ流にも弓をたたいて、いろんな神様や死者霊を呼ぶ託宣の方法が伝わっていました。もう今はおこなわれていませんが、弓による託宣はいざなぎ様から習ったことになっているようです。

いざなぎ流は、天中姫宮にみる巫女の技法と、いざなぎ様にみる男性宗教者の技法との、二つの宗教者の方法の混合であることが祭文に語られているわけです。このことは、早い段階ですでに高木啓夫先生が指摘されているのですが、ただ、これが事実を反映しているのか、あるいはまったくフィクションなのかというのはわかりません。ともかく、いざなぎ流にはそういう神話というべきものが伝えられているので、それを一つの手がかりにして、いざなぎ流の成り立ちを考えてみようと思います。

先ほど舞神楽をご覧になったと思います。今でこそ「舞神楽」という言い方をしていますが、斎藤さんの師匠でもある中尾計佐清太夫にお話を聞いたところ、昔はあんまり「舞神楽」という言い方はしなかったと言われていました。では何と呼んでいたかといえば、それは単に「舞」と呼んでおり、「神楽」を付けていなかったというのです。いざなぎ流で「神楽」というものは——後で恵比寿神楽がおこなわれますが——数人の太夫が御幣を持って、輪になって座り、いろいろ唱え事をするものです。

「神楽」の対になるのは「祈り」です。同じ祭文を唱える場合でも、「祈り」が

早口の祈り口調で唱えるのに対し、「神楽」は節をつけて、ゆっくり長く唱えます。

神楽の様子を見てみましょう（図1）。座敷に、本来は12人ですが、今は数人の太夫が輪になって座ります。中心になる太夫は床の間を背にして座り、前に弓を据えます。写真ではやや見えにくいのですが、天井からバツカイというものを下げます。輪の中心には「諸物」とか「法の枕」とも呼ばれる1斗2升の米袋が置いてあります。そしてその上には、12の倍数のお金（昔なら1200円、今なら1万2000円など）が入った封筒が置かれています。諸物は、お供え物と説明されてきました。一体の神様に対して2時間で一つの神楽をおこなうのですが、お供え物なので、諸物は一つの神楽の一つずついるのです。次の神楽になったら前の米袋をさっと片付けて、次の米袋と入れ替えます。

このお米は最後にどうなるかと言うと、太夫さんが家に持って帰ります。これが太夫さんの謝礼になるのです。神様がが多い家では、神楽が一つ増えるごとに太夫さんへの謝礼も増えるわけです。これは太夫さんが収入を増やすための方便なのかと失礼なことも考えてみましたけれど、どうもそうではないらしいというお話をこれからしていきます。

さて、私達がふつうイメージする神楽というものは舞であって、座ってやる神楽というものは、あまり私のイメージにありませんでした。よその県に似たようなものはないかと気にかけていたのですけれども、あんまり発見できません。

この写真（図2）はかなり似ていますね。しかし、やる人の数が12人どころではなく、たくさんの人が大きな御幣を持っています。真ん中にあるのも米袋ではなく太鼓です。これは、お隣の大豊町の岩原に伝わる「岩原神楽」という、やはり国指定重要無形民俗文化財の神楽におこなわれる「散華^{さんげ}」というものです。時間はいざなぎ流の神楽ほど長くなくて、15分か20分ぐらいです。大きな御幣を手にした人が輪になるというスタイルは、いざなぎ流の神楽によく似ています。ただ、これよりほ



図1 いざなぎ流の神楽。中央の太夫が本役で、その前に弓や諸物がすえられている。その上にバツカイの一部が見える。（高知県香美市物部町別役、2008年）



図2 岩原神楽の散華。氏神をトウヤに迎えて、酒宴の後に散華となる。散華が終わると庭で舞いが奉納される。散華を座っての神楽とすれば、座り神楽から舞いへ転じる、いざなぎ流と類似する。（高知県大豊町岩原、2012年）

かには似たものを知りません。

そこで、ちょっと頭を切り替えて、ほかのいざなぎ流の儀礼で米をどのように使うかをみてみます。これは「取り分け」という儀礼の写真(図3)です。二人の太夫の前(写真では左端)に桶が置かれて、中身は米です。これも「法の枕」と言います。中身の米は7升とか、いろいろ決まりがあります。この米の上に祭る神様の御幣を挿していって、それに向かって祈禱をするわけです。

「法の枕」の横には「みてぐら」という、悪いものをよりつけるヒトガタに相当するものがあって、そちらの方が注目されてきました。その一方で、法の枕が何なのかはきちんと説明できませんでした。御幣を立てる祭壇ぐらいに思っていたんですね。

これは、法の枕を正面から撮った写真(図4)です。山の神や水神、大土公など、取り分けて祭るいろいろな神や式王子の幣が米に立てられ、米の上にはやはりお金の袋が置かれています。

ここで、江戸時代の土佐で活動していた博士^{はかせ}の絵をみてみましょう(図5)。博士は、いざなぎ流太夫のルーツのひとつと考えられています。この絵の博士は、前に置いた弓をたたっています。職人絵歌合なので、博士が歌をよんでいます、



図3 取り分け。家の中に入り込んだ魔群やスソ(呪詛)などの穢れを除く儀礼。左側の桶が「法の枕」、中央が、スソを集める「みてぐら」。(高知県香美市物部町別役、2008年)



図4 法の枕。丸い容器に七升あるいは一斗二升の米を入れ、荒神・山の神・水神・天下正(てんげしょう)・四足・スソなどの幣を立てる。中央の飛び出た幣は高田の王子という式王子の一種で、スソを鎮める重要な役目を担う。(高知県香美市物部町別役、2008年)



図5 「土佐国職人絵歌合」博士 高知市立市民図書館若尾文庫蔵。文化・文政年間(1804~1830)頃の作。江戸時代の土佐で博士は陰陽師と異なる宗教者であった。歌は「かしこしな梓の弓に犬神のうらみもはれていつる月かけ」。

それを見ると、どうもイヌガミ（犬神）落としをやっていたようです。弓の横に置いてある^{さんぼう}三方の上にはなにか白いものが描かれています。絵なので何なのかよくわかりませんが、ひょっとしたらお米じゃないか、というふうに想像しています。

と言うのは、「土佐化物絵本」という資料にも同じく博士を描いたと思われる絵がありますが、そこに博士が唱えたとおぼしき言葉がびっしり書き込まれているのです。最初に氏神、続いて犬神、最後に先祖がおりてきます。その託宣の文句の中に「ふまぬし」という言葉が出てきます。「ふまぬし」というのはいざなぎ流でもよく使われますが、要するに依頼主のことです。「ふま」というのはお米のことを指すので、ふまぬしというのはお米を提供する者、すなわち祈禱の依頼主のことなのです。これも絵なのでしかとわかりませんが、弓をたたっている宗教者の後ろに山盛りになっている白い物体が描かれています。これが「ふま」かと思われます。もちろん「ふま」以外の物である可能性もありますが、「ふまぬし」という言葉があるので「ふま」とするのが妥当ではないかと思うわけです。

ではつぎに、土佐から離れて、日本の中ではどうでしょう。天中姫宮というのはふま占いが上手な女性だということなので、やはり巫女を想定してみたいと思います。これは『春日権現験記絵』の一場面です（図6）。巫女が、曲げ物の上にお膳のようなものを置いて、何か白いものが盛り上がっているのが見えます。『絵巻物による日本常民生活絵引』（渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編、平凡社、1984）には、これは盛砂だろうというふうに書いてあって、砂のかわりに米を用いることもある、とも書かれています。巫女が米を使っている可能性が出てきました。図7も同じ『春日権現験記絵』ですが、こちらでは巫女は鼓を打っています。やはり台の上に何か白いものが盛り上がっています。この時代には、あまり弓は使っていなかったようで、鼓の音で神降ろしをしているようです。



図6 「春日権現験記絵」巻六 春日大社蔵。「護法うら」をおこない、大明神が降りて来て病氣の原因を告げる場面。巫女は山伏に占いの結果を語っているのだろう。傍らには鼓も置かれている。

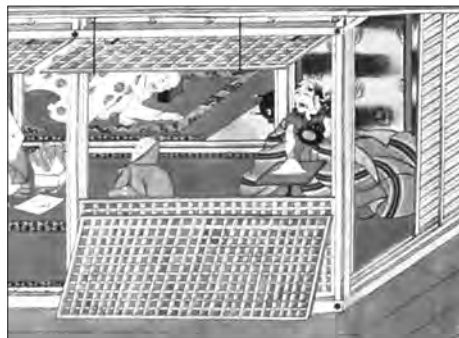


図7 「春日権現験記絵」巻十五 春日大社蔵。病氣を治すために「みこをよひて、大明神をおろしたてまつれば、このみこのいひけるは…」という場面。春日大明神は巫女に憑依するのだろうか、それとも米とおぼしき物体に降ろし、それを見て判じるのだろうか。

中世から近世に作られた『職人絵歌合』の類にもたくさん巫女の図像が出ています。図8は「建保歌合異本」の巫女です。巫女は弓を据えて、かたわらに鼓が置いてあります。黒田日出男氏や酒向伸行氏によると、巫女の祭具は鼓から弓へ変化しているようです。両方あるのはその移行形態なのでしょう。そして、左側に膳の上に白いものが乗っています。私の説にとっては残念なことに米とは言い難く、白い綿か布のようなものです。そのほかの職人歌合の絵を見ても、いずれも米らしくありません。

図9は「江戸職人歌合」の「いちこ」です。小さいながら弓がありますが、その横の盆に乗っているのは、どうやら米といっても良さそうです。上に乗っているのはお金でしょうか。お米とお金というセットは、いざなぎ流の諸物（法の枕）と一致します。中山太郎の『日本巫女史』（大岡山書店、1930）にも、笹ハタキと称する市子の前に、膳に山盛りになった米のようなものが描かれています。古代と近世の巫女の図像に米が付き物だとすれば、間の中世の巫女の場合もひょっとしたら本当は米だったのが、書き写すうちに知らない人が綿みたいなものに変えたのではないかと都合の良いことを考えてみたりもします。

現代の巫女の資料を見ても、やっぱり米は出てきます。青森県をはじめ東北地方の巫女の習俗に顕著です。青森県のイタコが仏おろしの時に準備するヤマは、お米に木の枝や錫杖を立てたものです（図10）が、仏様がこの山に隠れて話をするなどといった伝承があります。米に何かを立てるとというのがどうも口寄せの必須アイテムだったらしいのです。



図8 「建保歌合異本」巫女。静嘉堂文庫蔵（『日本庶民生活史料集成』第30巻 三一書房、1982年より）。建保（1213—1219）年間の職人歌合の江戸期の写本。巫女は曲げ物と思われる丸い台の上に弓を据え右手で叩く。手前には鼓と布の様なものが見える



図9 「江戸職人歌合」いちこ 国立国会図書館蔵（『日本庶民生活史料集成』第30巻 三一書房、1982年より）。小さいながら弓があり、右側の盆には米とおぼしき白い物が盛られ、その上には銭らしき物が並んでいる。



図10 青森県のイタコのヤマ。文化庁文化財保護部編『民俗資料選集15 巫女の習俗Ⅱ 青森県』（国土地理協会、1986年）より。青森県南津軽郡平賀町のイタコは、ホトケの依り代として、三升三合三勺のオサゴ（米）に、春は柳、秋はもみじなどの木を立て、麻糸と半紙1丁を下げる。これをヤマと言い、ホトケ様はこのヤマに隠れて話をするという。図では錫杖を立てている。

ふたたびいざなぎ流の神楽に戻ってみましょう。図11は、先程の神楽の舞台を上から見たところです。左側の太夫が中心になる本役で、弓をたたいています。中央の紙袋が諸物です。1斗2升のお米が入っています。その右に枡に入ったお米があって、右側の人が持っているお膳が少し見えています。この膳を持つ役を「向こう神楽」と言って、神楽の途中で膳の上にお米を盛ります（図12）。この神楽は、ミコ神の取り上げ神楽と言って、死んだ人の霊を神様に祭り上げる儀礼です。死んだ人ですから、お墓の中に長いこと穢れた状態にある。それを清めて、ミコ神様という神様の位にあげていくのです。「向こう神楽」は、神楽のクライマックスである水ぐらえの時、枡からお膳の上に米を3回半握っては落とし米の小山を作り、それをゆすって崩して枡に戻すという行為を繰り返します。何をしているのか太夫さんに聞いてみると、枡から取る米の中に一粒だけミコ神様になる死者霊のお米があって、そのお米が最初は山の下の方にいるのが、繰り返すうちにだんだん位が上って、米の小山の上の方へ上っていくのが見えるというのです。これは米占いの一種です。

米占いは、広島県の比婆荒神神楽でもおこなわれました。家々のカマドの神である土公神どくこうじんを祭る土公神遊びの一場面です。土公様の幣を並べ、その前で太鼓をたたいて祭るのですが、ここでも、米を膳に入れて、戻したときに残った米粒の数で土公神様の意思を占うといっています（図13）。同様の米占いは、同じ広島県の弓神楽でもおこないます。お米を手にとって、勺の上に散じ、何粒残ったかで占いをします。



図11 本役と向こう神楽。左側が本役の太夫で、弓と諸物をはさんで、反対側に「向こう神楽」が座る。（高知県香美市物部町別役、2008年）



図12 向こう神楽。向こう神楽が持つ膳。米を3回半握っておろし、小山を作る。この米の中にミコ神になる死霊を象徴する米が一粒あって、少しずつ小山を登っていくと言う。（高知県香美市物部町別役、2008年）



図13 比婆荒神神楽の土公神遊び。各家の土公神（どくこうじん）を降ろし神意を占う儀礼。土公幣と太鼓を前に神職が座し「盆殿遊び」をおこなっている。つかんだお洗米を膳に入れ、揺り動かして米を遊ばせる。米を戻す時に残った米粒の数で吉凶を判断する（東城町教育委員会編『比婆荒神神楽』、1982年）。（広島県庄原市竹森、2011年）

米がいざなぎ流独特ではなくて、中国地方の神楽でもみられることがわかりました。図14は昭和40年代のいざなぎ流の神楽の写真です。今は米袋を置いている所に俵が据えてあって、その俵に御幣を何本かさしてあります（図15）。諸物（法の枕）の古い姿です。御幣をさした俵は本当にただの供物なのでしょうか。

島根県の大元神楽では、舞台の柱に「山の俵」というものをくくりつけます（図16）。たくさんの幣がさされていますが、これこそ主神の大元様を勧請するものとされています。俵は対角線の柱にもう一つあって、神がかりのときには、俵からもうひとつの俵の間に、藁の蛇をくくりつけて、その蛇にもたれて託宣をします。

広島県の比婆荒神神楽で、龍押し^{たつお}しといって、藁の龍が刈り取りの終わった田んぼを暴れ回り、家に戻るとやはり柱にくくりつけて託宣をおこないます。ここでは柱に俵はついていませんが俵は使います。託宣の場面は真っ暗で何も見えなかったのですが、神がかりになった人は図17の俵の上に腰掛けて託宣したようです。

島根県の隠岐の神楽では、今はほとんどおこなわれていない「注連行事」という行事の中でやはり巫女が出てきて俵に座ります（図18）。どうも昔はこの状態で神がかりになったようです。東北地方の巫女は、成巫式には俵に座って、その



図14・15 いざなぎ流の米俵。1965年1月に物部村別府中尾の松本家でおこなわれた神楽の様子。諸物は俵で、御幣が挿してあるのがわかる。だが、俵の中は米ではなくトウキビ（トウモロコシ）らしく、幣の種類は不明である。（撮影 吉村淑雨）



図16 大元神楽の山の俵。東方は元山（もとやま）と言って大元神の座で、西方の端山（はやま）は大元神以外の地主神の座。どちらもミサキ幣数十本と櫛の藁を挿す。中身は籾3斗である。山の俵に大元神を招神する山勧請は儀式の中で最も重要なもの。神楽の終盤、託太夫は、元山から端山に引き渡された藁蛇によりかかって託宣をおこなう。この俵は、祭事終了後、神がかりした男の所得となる（牛尾三千夫『神楽と神がかり』、名著出版、1985年）。（島根県桜江町、1994年）

周りを師匠とか弟子とか先輩たちとか
 が取り囲んで文句を唱えているうちに
 神がかりになるといわれています。俵
 が神がかりのアイテムであることがわ
 かります。

このように各地の神楽を見ていきま
 すと、いざなぎ流の神楽は決して孤立
 したものではなく、各地の芸能や信仰
 とつながっていることがわかります。

図19は、比婆荒神神楽の祭壇です。
 円筒形の容れ物に穀物が入られ、巨
 大な御幣をさしてあります。私はいざ
 なぎ流の取り分けの法の枕の大きなも
 ののだと感じました。



図17 比婆荒神神楽の俵。ここでも、藁製の龍を
 舞台の対角線にくくりつける。神柱（しんばしら）
 は四季の歌などが歌われる中、手草（白木綿の布）
 を持って激しく舞いながら神がかりする。まわり
 の者は「鎮まり給え、鎮まり給え」と呼ばわりな
 がら神柱を俵に座らせると、米による占いをおこ
 なう（東城町教育委員会編『比婆荒神神楽』、
 1982年）。（広島県庄原市竹森、2011年）



図18 島根県隠岐神楽の注連行事。写真提供：島
 根県立古代出雲歴史博物館。神子は、麦3斗の入
 った俵に腰掛け、頭上の玉蓋が上下する中で神が
 かりしたと言う（牛尾三千夫『神楽と神がかり』、
 名著出版、1985年）。写真は2010年に島根県立
 古代出雲歴史博物館で開催された企画展「島根の
 神楽 芸能と祭儀」で再現されたもの（撮影 中
 上明）。



図19 比婆荒神神楽の祭壇。8升の玄米を入れた
 1斗杓に奉幣（幣串5尺）と高幣（幣串5尺）を
 挿す。龍押しの後、斎主がこの奉幣を持って神柱
 の頭上にかざし、神降ろしをする（東城町教育委
 員会編『比婆荒神神楽』、1982年）。（広島県庄原
 市竹森、2011年）

今回は米をキーワードに追いかけてみましたが、常に米かという、必ずしもそうともいえません。今日のプログラムの最後に見ていただく「えびす神楽」では諸物を置くところに、お酒、お金、穀物を置きますが、穀物は必ずしもお米に限らないのです。そうすると、お米はある一定の神格と結びついていたのかも知れません。それは、オンザキ様やミコ神様ではなかったでしょうか。

最初の図1で天井から下がっているバツカイのことにふれましたが、「ばっかい仕立て」というやり方は、あとから伝えられたという伝承があります。そうすると、いざなぎ流の神楽を構成している基本要素の中でもひょっとしたらお米の部分というのはやや古いものであって、バツカイを飾って、その下で神楽をおこなうのは新しいという認識があったのではないのでしょうか。バツカイの意味については、斎藤さんの研究にも出ていますように、オンザキ祭文のなかに、穢れたオンザキ様を引き上げるときにばっかい仕立てで引き上げるという部分があります。そうすると、神楽のなかの穢れた神を清める部分は、バツカイとともにあとで追加された可能性も出てくるかなと思います。米俵を置いてそこに神を呼び寄せて、にぎやかにして神様を楽しませるという部分がまずあって、そこにバツカイによる神の清めが追加されたという可能性もあるのです。

このような検討を重ねていくと、いざなぎ流は周辺のいろんなものと関連性をもっているのだと強く感じられるのです。

[うめの みつおき]